

# 複式学級の学習指導に関する一考察 —複式学級授業研究会の取組を通して—

研究開発課 主任指導主事 平林 利規

【要旨】 本県は、複式学級を有する小学校の割合が全国と比較して高い。また教員の急激な世代交代から、複式学級を担当した経験のない教員の増加が予想される。本稿では、まず、各教育センター等が作成した複式教育に関する手引や実践事例等を基に複式学級を担当する教員が抱える学習指導上の課題と複式学級の特性を生かす学習指導について整理した。次に、当センターが立ち上げた複式学級授業研究会において課題解決の手掛かりと複式学級の特性を強みとして生かす学習指導について取り組んだ。

【キーワード】 複式教育，複式授業，複式学級の学習指導，主体的・対話的で深い学び

## 研究協力者

研究協力者

新宮市立高田小学校	教諭	坊 和美	那智勝浦町立市野々小学校	教諭	岡田 理恵
新宮市立熊野川小学校	教諭	山本 賢太郎	那智勝浦町立色川小学校	教諭	関口 英志
北山村立北山小学校	教諭	和田 康一	那智勝浦町立太田小学校	教諭	中西 梓

新宮市教育委員会

指導主事 竹村 伸也

那智勝浦町教育委員会

東牟婁地方教育委員会連絡協議会指導室  
指導主事 尾崎 元博

研究アドバイザー

和歌山大学教育学部附属小学校 教頭 川村 繁博

## 1 学校教育における近年の状況

### (1) 大量退職，大量採用の時代

教員の大量退職，大量採用の影響から，学校現場は，ベテラン教員が減少し，初任者等若手教員が増加する状況にあり，急激な世代交代が進行している。図1は，令和元年における本県の小学校教員の年齢構成（棒グラフ）と，その全国比（折れ線グラフ）を表現したものである（全国比とは，全国の年齢構成の平均を本県の教員数に当てはめたもの）。本県では，50歳以上の教員の割合が約41%であり，これは全国的にみても割合が高い。一方，30歳代後半から40歳代後半の教員数の割合は，全国と比べて低い状況にある。多くのベテラン教員が教職を去り，代わって多くの若手教

員が教職に就く。近年におけるこの激しい教員の世代交代は，教員の年齢構成の不均衡のみならず，結果として先輩教員から若手教員への指導技術等の継承が困難となっている。このような状況においても，若手の教員が自

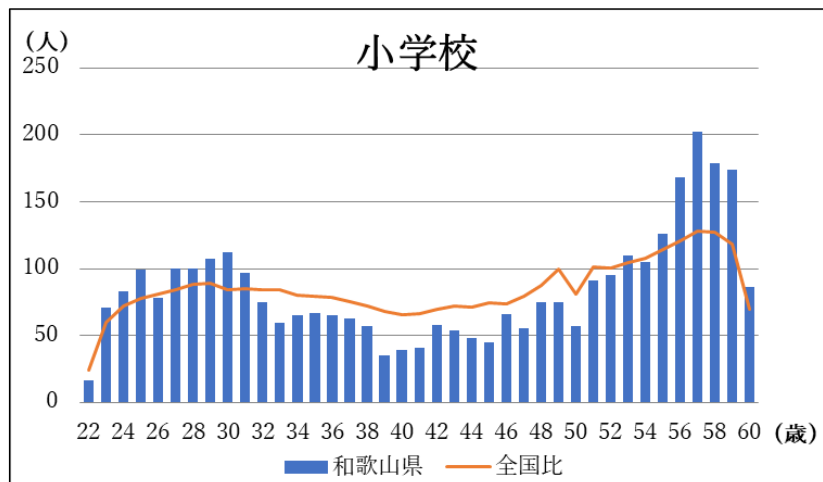


図1 和歌山県の小学校教員の年齢構成—文部科学省学校基本調査令和元年度データを基に筆者作成

信をもって生き生きと教育活動に当たることができるようにするためには、ミドル層が中心となって若手教員を支援・指導できる環境を整備する必要がある。

## (2) 本県の小学校数と複式学級を有する学校数の変化

人口減少が進む我が国において、学校の小規模化も進行している。とりわけ、地方では都市部への人口流出も相まって児童生徒数の減少により、学校の小規模化は都市部に比して顕著である。文部科学省学校基本調査によると、本県の平成28年から令和3年にかけての小学校数は、267校から248校と減少している。そのうち複式学級を有する小学校（以下、複式校と略記）も、78校から68校に減少している。また、学校数に占める複式校数の割合は、平成28年度から令和元年度までの4年間を平均すると約26.5%であるが、令和2年度は27.4%と増えている（表1）。これより、本県小学校の4校に1校が複式校であるといえる。このことは、全国と比較しても割合が高い（表2）。

表1 本県の小学校数と複式校数の推移  
—令和3年度文部科学省学校基本調査—  
—より作成

年度	平成28	平成29	平成30	令和1	令和2
学校数	267	260	255	249	248
複式校	78	66	63	66	68
割合(%)	29.2	25.4	24.7	26.5	27.4

表2 全国の小学校数における複式校数の割合  
—令和3年度文部科学省学校基本調査—  
—より作成

小学校全体の数	複式学級を有する学校(%)	複式学級のみ学校(%)
19892校	1938校(9.7%)	380校(1.9%)
※複式学級を有する学校には、複式学級のみ学校を含まない。		

## (3) 複式学級とその編制

複式学級とは、国の定める学級編制基準（表3）に照らして、児童又は生徒数が少ないために一つの学年の児童又は生徒だけでは学級の編制ができない場合に、異なる二つ以上の学年の児童生徒を一学級に編制した学級のことである。これに対して、同学年の児童又は生徒で編制する学級を単式学級という。

複式学級の法的根拠としては、「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（昭和33年法律第116号）」（注1）

に以下のように示されている。

「第三条 公立の義務教育諸学校の学級は、同学年の児童又は生徒で編制するものとする。ただし、当該義務教育諸学校の児童又は生徒の数が著しく少ないかその他特別の事情がある場合においては、政令で定めるところにより、数学年の児童又は生徒を一学級に編制することができる。」（※1）また、一学級の児童又は生徒の数の基準は、同法律第三条第二項「公立小・中学校及び義務教育学校の一学級の児童又は生徒数を標準として、都道府県の教育委員会が定める」と示されている。本県教育委員会では、この基準を受け、次の学級編制基準（表4）を定めている。

表3 学校編制の区分と一学級の児童数  
（全国標準）

	学級編制の区分	一学級の児童の数
小学校	同学年の児童で編制する学級	40人（第一学年の児童で編制する学級にあっては、35人）
	二の学年の児童で編制する学級	16人（第一学年を含む学級にあっては、8人）

表4 学校編制の区分と一学級の児童数  
（和歌山県基準）

	学級編制の区分	一学級の児童の数
小学校	同学年の児童で編制する学級	38人（第一学年の児童で編制する学級にあっては、35人）
	二の学年の児童で編制する学級	16人（第一学年を含む学級にあっては、8人）

## (4) 学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」について

令和2年度より全面実施となった小学校学習指導要領（以下、学習指導要領と略記）においては、教育課程全体や各教科等の学びを通じて「何ができるようになるか」という観点から、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育んでいくことを目指すとしている。また、全ての教科等の目標及び内容についても、この3つの柱に基づいて再整理している。

こうした資質・能力を育成するためには、これまで以上に質の高い授業を行う必要がある。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編（以下、解説総則編と略記）に、「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を行うこと」（※2）と示されている。そして、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の具体的な内容については、総則解説編に以下の3つの

視点に立った授業改善を行うことが示されている。(※3)

- ①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- ②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考えを手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- ③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

「また、主体的・対話的で深い学びには、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、例えば、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくり出すために、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった観点で授業改善を進めることが重要となる。」(※4)とも示されている。

## 2 研究の目的と進め方

1(2)で述べたように本県は、全国の状況と比較して、複式校の割合が高い。また、周囲を山間部に囲まれ、地理的・距離的に制約が大きい地域が多くある本県については、統廃合で学校規模を適正化することも容易ではなく、複式校は今後も一定の割合で存在することが予想される。北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センターによる「へき地・複式・小規模教育の手引—学習指導の新たな展開—」(令和3年3月)(以下、北海道教育大学手引と略記)では、近年、複式学級・少人数の特性を強みに生かした「個に応じた指導方法」の応用的な実践や協働的な学び合いは、都市部の学校でも可能性が注目されているとしており、複式学級の指導方法は大人

数で編制される都市部の学校の指導にも応用できることを示唆している。例えば、複式授業の間接指導における自立的学習活動、子供の主体的な探究学習、異学年を生かした学び合い学習、体験的学習活動、地域に開かれた協働学習、教科を越えた横断的な学習等は、現行学習指導要領の新しい教育課程の課題ともなっているとしている。つまり、複式授業における課題を把握し、その解決を講じることは学習指導要領に示される課題解決に通じるものと考えられることができる。

そこで、本稿では、全国の教育センター等が作成した複式教育に関する手引やガイドブック、研究会の構成員である複式学級担当教員(以下、協力教員と略記)からのアンケート調査の結果を参考に、複式学級を担当する教員が抱える学習指導上の課題と複式学級の特性を整理する。その上で、和歌山県教育センター学びの丘(以下、当センターと略記)が立ち上げた令和3年度複式学級授業研究会(以下、研究会と略記)の取組としての算数科の授業づくりを通して、複式学級の特性を強みに生かした学習指導について、具体化するとともに、学習指導上の課題解決に迫ることとした。研究教科を算数科に設定した理由として、算数科は、学習の系統性や既習事項との関連が他の教科より理解しやすく、複式学級の経験が少ない教員も授業づくりに取り組みやすいと考えたからである。

なお、研究会の専門的知識や理論的側面のアドバイザーとして、和歌山大学教育学部附属小学校教頭 川村繁博氏を招聘し、助言を受けながら研究を進めた。川村氏は、現任校において複式教育及び算数科教育に係る研究や授業実践について長きに渡り精力的に取り組んでいる。その知見や指導法について学ぶことは、複式学級を担当する教員に求められる資質・能力の育成や実践的指導力の向上を図ることができる考える。

## 3 複式学級の学習指導の基本的な考え方

### (1) 学習指導上の課題

北海道立教育研究所で実施した複式教育研修講座の受講者アンケート結果では、学習指導について次のような課題や悩みが3点挙げられている。

- ・複式学級における学習指導に関する用語が難しい。
- ・一方の学年の児童に指導している間、もう一方の学年の児童を上手に自学自習させることができない。

- ・複式の授業の準備をどう進めていけばよいか、よくわからない。

また、島根県教育委員会が作成した「複式学級の手引（平成27年度改訂版）」（以下、島根県教育委員会手引と略記）には、2つの学年を同時に指導する場合の学習指導上の課題を次のようにまとめている。

- ・直接指導を行う時間が短い。
- ・等質的な行動や同調的な発言が多くなりがちで、多面的、発展的な考え方を育てにくい。
- ・実験や作業など、一人当たりの負担が大きくなりやすい。

当然のことながら、複式学級では、複数学年の学習活動を同時に展開しなければならない。また、編制された学年が少人数であるため、集団で活動する学習が少なくなる。

## （2）複式学級の特性を生かす学習指導

複式学級の少人数であるという特性を生かす学習指導について、島根県教育委員会手引では、複式学級の授業において、学年別に授業をする場合、2つの授業を1人の教員が担当するため必然的に単式学級以上に児童だけで学習を進めなければならない状況が生まれるとある。このことは、短所のようにあるが児童の主体的な学びの場面として生かせば長所となし、授業改善の視点としての捉え方の転換を示している。

また、児童が自分たちだけで学習を展開できるように、事前に本時の目標を明確にし、直接指導をしなくとも学習できるような展開を考え、それを児童によく理解させたり、慣れさせたりするとともに、学習をリードするガイドを育成していくなどの方法上の工夫が必要であるとしている。

### ア 直接指導と間接指導について

和歌山大学教育学部附属小学校が作成した「複式ハンドブッカーすぐにつかえる複式指導術一」（以下、和大附属小ハンドブックと略記）では、直接指導における学年別指導（注2）について、教師がある学年の子供に対して直接的な指導を行い、基礎・基本の指導や学びの筋道の修正ができ、主体的な学習活動につなげるための評価を加えることで意欲につなげることができる。とある。

間接指導については、直接指導ができない学年の子供が学習活動を進められるように指示しておいたり、主体的に授業を進めたりするように指導するものとし、学び方を身に付

けた子供たちが、自分たちの学びの筋道で取り組むことができるとある。教師は、間接指導の時間を子供たちが自ら学び自ら考える力を育む時間として捉える必要がある。したがって、複式学級の学習指導においては、間接指導の時間に子供が主体的に学習を進めることができるよう、間接指導につなげる直接指導の働きかけが大切である。

### イ 主体的に学習に取り組む態度の育成

笠井（2020）は、「算数科では、子供自らが、問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、問題解決の過程を振り返り、よりよく解決したり、新たな問いを見いだしたりしているかどうかなどの『主体的な学び』の視点から授業改善をすることが求められる」（※5）と述べている。また、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりのポイントとして、「まずは子供が主体的に学習が進められるようにすることが大切である」（※6）とも述べる。さらに、笠井（2015）では、子供たち一人一人が自ら自然に考え続けている次のような姿が、算数科における主体的に問題に取り組む態度として例示している。

- ・問題をこう変えたらどうなるのだろうか。
- ・何がこの問題を解くポイントなのだろうか。
- ・他の人に別の解き方はないか尋ねてみよう。

前述のように、間接指導時においては、児童だけで学習を進めなければならない状況が必然的に起こる。その時間に上記のような子供の姿が現れるような学習展開の工夫が大切であるといえる。

## 4 研究会の実際

### （1）複式学級授業研究会の概要

3で述べた課題解決を目指して立ち上げた研究会には、新宮市教育委員会、那智勝浦町教育委員会及び北山村教育委員会の協力の下、6つの小学校から複式学級担当教員6名が協力教員として参加し、年間5回の研究会を実施した。研究会は、令和2年度に実施した小学校・中学校国語科授業研究会の研修形態を参考に、限られた研修時間を効率よく活用するため、担当指導主事等が作成した研修動画をオンデマンド（以下、オンライン動画研修と略記）にて事前視聴を求める回も設定した。そうすることで、必要となる知識を既に身に付けた状態で研究会に参加できるため、知識の定着や応用を重視した演習時間と各教員が

自身の実践を省察する時間の確保を目指した。また、協力教員の所属校と当教育センターとは地理的にも距離が離れているため、協力教員が移動に要する時間を少なくできるように、新宮市立熊野川小学校と那智勝浦町教育センターの2会場をオンラインで繋ぐ形態も一部の回で取り入れた。

## (2) 事前アンケート調査による課題把握

協力教員6名に事前アンケート調査を実施した。調査結果から特徴的な項目について次に述べる。調査項目「複式学級担当経験年数」に対する回答は、担当1年目の教員が2名、2年目1名、4年目2名、6年目1名であった。このように、協力教員のほとんどが、複式学級担当の経験の少ない教員であった。

調査項目「算数科の学習指導の類型」に対する回答については、5名の教員が学年別指導で同教科、異単元の組合せによる指導を行っていた。

調査項目「算数科の授業で、児童が自分たちで学習できるように工夫していること」に対する回答については、

- ・文章問題の解き方の流れを示す。
- ・座席を島のように学年別に集めて配置する。
- ・デジタル教科書を活用する。
- ・「渡り」と「ずらし」を意識し、学習の流れをホワイトボードに明示する。
- ・毎時間の学習の流れを示した「学習シート」を作成して提示し、学習リーダー（ガイド）を中心に学習を進めていく。

という内容の記述があった。

調査項目「複式学級（学習指導）のよさ・課題」に対する回答については、（よさと思うこと）

- ・自分たちで学習を進める自主的・主体的な力が向上すること
- ・異学年交流で成長できることや見通しを持った学校生活を送りやすいこと
- ・仲間との学び合いで理解が深まること
- ・少人数で、一人一人に配慮が行き届くため、丁寧な個別指導ができることや一人一人に活躍の場があること
- ・上の学年がよいモデルを示すことができること

という内容の記述があった。

（課題と思うこと）

- ・直接指導の時間が短くなること
- ・多様な意見、考え方に触れる機会が少ないこと

- ・同年代の児童との交流が少ないことや固定化された人間関係でコミュニケーションが広がりにくいこと
- ・間接指導時に子供たちで進められるよう準備や手立てをしておかないと、計画どおりに進まないこと
- ・単純に半分しか担任に関わってもらえないこと

という内容の記述があった。

調査項目「複式学級を担当して困ったこと」に対する回答については、

- ・2学年分の教材研究に時間がかかること
- ・直接指導しなければならない場面が多くなってしまうこと
- ・授業の組み立て（単元構成・本時の流れ）が難しいこと

等の記述があった。

以上に示した事前アンケート調査の結果から、協力教員のほとんどが算数科の授業を学年別指導をしていることが分かった。そして、単式学級以上に児童だけで学習を進めなければならない状況が生まれることを学習指導上の課題だとしている。一方で、児童に直接指導できる時間が短くなることを課題として捉えるだけでなく、児童の主体的な学びの場面として生かせるよさとの捉えもしている。また、児童が自分たちだけで学習を進められるよう、事前に学習の流れを児童に示す工夫をしたり、学習リーダー（ガイド）を育成するなどの方法上の工夫をしたりしている。主体的な学びを実現するための授業改善の視点として複式学級の実態の捉え方の転換を示している回答も見られた。研究会で実施した事前アンケートの結果と各教育センター等が作成した複式教育に関する手引等にある複式学級の特長と学習指導上の課題には共通する内容が多く見られることが分かった。

## (3) 研究会の具体的な取組

4(1)に示した「令和3年度複式学級授業研究会」について実施したオンライン動画研修と5回の研究会の内容について述べる。表5に、オンライン動画研修、表6には、研究会の概要を示す。

### ア 第1回研究会（6月）

第1回研究会の目的を「本県における複式学級の現状と課題について理解すること」、「研究教科である算数科の学習指導要領が、目指す方向性とそれを実現するための授業改善の視点について確認すること」、「事前アン

ケートの結果や各協力教員の実践交流から複式学級の特性と学習指導上の課題を共有すること」とした。

第1回研究会は、研修時間を放課後の60分と設定した。また、協力教員の移動時間を軽減できるように所属校に近い、新宮市立熊野川小学校に3名、那智勝浦町教育センターに3名が集合し、担当指導主事が各会場に出向いた上で両会場をオンラインで繋いだ研修と

した。研究会の限られた時間を効率よく活用することと研修内容とのつながりを考え、事前視聴動画①を小学校学習指導要領算数科の改訂のポイントを確認できる内容とし、オンライン動画研修での視聴を求めた。研究会では、学習指導要領で求められる主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点を取り入れながら、授業づくりに取り組むことを確認した後、算数科授業づくりにおける

表5 オンライン動画研修

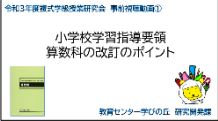
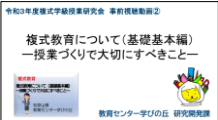
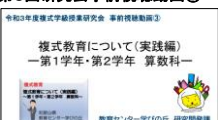
時間	内容
	<b>11分30秒</b> <b>小学校学習指導要領算数科の改訂のポイント</b>
	<b>10分05秒</b> <b>複式教育について(基礎基本編) —授業づくりで大切にすべきこと—</b>
	<b>30分04秒</b> <b>複式教育について(実践編) —第1学年・第2学年 算数科—</b>
	<b>48分35秒</b> <b>北山小学校 和田教諭(提案授業者)による児童の実態把握のための授業動画</b>

表6 研究会の概要

実施月・形態等	実施内容
<b>第1回 6月 【講義・演習】</b> 新宮市立熊野川小学校と那智勝浦町教育センターをオンラインで繋いだ研修	1. 研究会の趣旨説明 2. 和歌山県の複式教育の現状について 3. 学習指導上の課題共有—事前アンケート結果から— 4. 事前視聴動画「学習指導要領改訂のポイント」振り返り 5. 実践交流「算数科の授業づくりについて」
<b>第2回 7月 【講義・演習】</b> 新宮市立熊野川小学校と那智勝浦町教育センターをオンラインで繋いだ研修	1. 教科書の構造について 2. 事前視聴動画「複式教育について(基礎基本編) —授業づくりで大切にすべきこと—」振り返り 3. 実践交流「直接指導と間接指導について」
<b>第3回 11月 【講義・演習】</b> 教育センター学びの丘で集合研修	1. 【講義】「複式学級授業づくりについて」 和歌山大学教育学部附属小学校 教頭 川村 繁博 氏 2. 【演習】第3学年「重さのたんいとはかり方」の授業づくり 第4学年「垂直、平行と四角形」の授業づくり (1)教材分析 (2)付けたい力の明確化 (3)主体的に取り組むために考える必要感のある課題設定 (4)本時の授業づくり 3 研究アドバイザーからの助言
<b>第4回 11月 【研究内容を具現化した提案授業】</b> 北山村立北山小学校で集合研修	1. 提案授業を参観するポイントの共有 2. 提案授業参観 第3学年「重さのたんいとはかり方」 第4学年「垂直、平行と四角形」 3. 【研究協議】「本時の目標を達成するために『直接指導と間接指導』における教師の働きかけは効果的であったか。」を協議の視点とし、子供の具体的な姿から成果・課題を見いだす 4. 研究アドバイザーからの助言
<b>第5回 12月 【実践交流・まとめ】</b> 所属校、那智勝浦町教育センター及び教育センター学びの丘をオンラインで繋いだ研修	1. 各協力教員からの実践報告 2. 研究会のまとめ

課題を「児童の実態の視点」「複式授業の視点」「教科の視点」で共有するワークショップを行った(図2)。

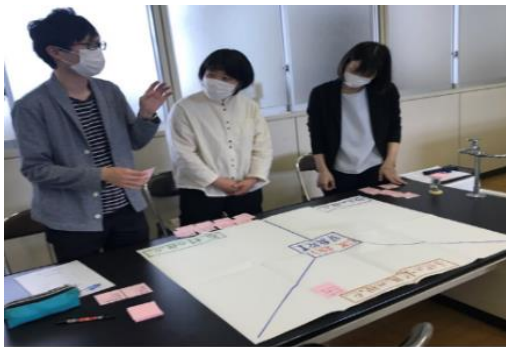


図2 算数科授業づくりにおける課題共有のためのワークショップの様子

3つの視点から出された主な課題を整理する。

「児童の実態の視点」

- ・個々の学力に差が見られる。
- ・多様な考え方が出にくい。

「複式授業の視点」

- ・直接指導が重なる。
- ・間接指導時に、つまずいている児童に関わることができない。
- ・予定していた活動が時間内に終わらない。

「教科の視点」

- ・操作や体験的な活動ができない。
- ・内容を正しく指導できているか。

上記の課題は、3(1)に示した学習指導上の課題と一致するものもある。協力教員の事後アンケートには、「他校の先生と複式の授業について話す機会があまりなかったので、思いを共有できて有意義でした。」「短い時間で動画視聴できてよかったし、内容も分かりやすかったです。事前に視聴することで、趣旨説明と課題の共有に時間を多くとれた点がよかったと思います。」という記述があった。次回の研究会では、複式学級の特性を強みとして生かした学習指導について算数科の授業づくりを通して具体化するとともに、学習指導上の課題解決を目指すことを伝えた。

イ 第2回研究会(7月)

第2回研究会も第1回研究会と同じく2つの会場をオンラインで繋ぐ形態で実施した。第2回研究会の目的を、3(1)等に示した『複式学級における学習指導に関する用語が難しい。』『複式の授業の準備をどう進めていけばよいか、よくわからない。』等の学習指導

上の課題解決に迫ること、「直接指導と間接指導についての実践交流を通して、複式学級の特性を生かす学習指導を実現するための省察をすること」とした。事前視聴動画②を、学習指導に関する用語や直接指導と間接指導における留意点等の解説を内容とする当センターの動画研修パッケージ(注3)にある動画コンテンツ「複式教育について(基礎基本編)―授業づくりで大切にすべきこと―」とし、オンライン動画研修での視聴を求めた。研究会では、複式授業の準備や主体的な学びの実現の手掛かりとなるよう、教科書の構造について理解するワークショップを行った(図3)。



図3 教科書の構造を理解するワークショップの様子

また、協力教員が「直接指導と間接指導について」の指導を通して子供に身に付けさせたい力や留意点等を交流し、自身の指導について省察する機会とした(図4)。協力教員から、事前視聴動画について「複式の指導に携わる全ての教員にとってありがたい情報が詰まっているなど思いました。」「事前視聴動画の内容が研修内容と関連していて、とてもよかった。」という記述があった。



図4 ワークショップの成果物

研究会について、「教科書をうまく活用できれば、経験の短い教師でも進めやすい。」「教科書を上手く活用することで系統的な指導が実現すると感じた。」「『子供たちにどんな力を身に付けさせたいか』をあまり意識できていなかったと反省しています。直接指導、間接指導共に、指導である以上、無駄のないように

活動内容を精選し授業づくりに取り組みたいです。」「先生方と交流し、複式教育の中でこそ子供たちに身に付けさせられる力もあると改めて気付きました。」という記述があった。

今回は、研究アドバイザーを招聘し、主体的な学びを実現するための授業改善の視点を踏まえ、算数科の授業づくりに取り組むことを伝えて終えた。

#### ウ 第3回研究会（11月）

第3回研究会は目的を、「提案授業で実施する教材を用いて主体的な学びを実現する複式学級の授業づくりを行う」としたため、協力教員全員が集合して研修をする必要があると考え、当センターを会場とし、午後から210分の研究会を設定した。事前視聴動画③を、動画研修パッケージにある研究アドバイザーの川村氏が講師を務めた「複式教育について（実践編）—第1学年・第2学年 算数科—」とし、オンライン研修で視聴を求めた。研究会では、複式学級における授業づくりについて学びを深めるため、研究アドバイザーより、「複式学級授業づくりについて」と題し講義を受けた。その後、小学校第3学年「重さのたんいとはかり方」（東京書籍 新しい算数3下）、第4学年「垂直、平行と四角形」（東京書籍 新しい算数4下）を扱い、教材分析や1時間の学習展開を考える等、授業づくりのためのワークショップを行った（図5）。この



図5 授業づくりのためのワークショップ

教材を扱ったのは、第4回研究会において本教材を用いた提案授業を実施するためである。研究アドバイザーは、講義の中で、自身の実践では、子供が主体的に問題解決に取り組むために、子供に考える必要感を感じさせられる課題（問い）の提示を大切にしていると述べた。そのために、提示をする際には、子供

から「分からない」を生み出すことをねらって、問題解決のために必要な情報の全ては与えないようにしているという。このような授業を実践するためには、子供が「分からない」と言える学級の雰囲気醸成しておくことの重要性も併せて述べた。

研究アドバイザーは、教材研究をする際に、学習指導要領の内容からこの単元や教材で子供に「何を学ばせるか」を捉えるという。この学習は、「子供にとって何が難しいのか」「何に気付かせたいか」そのために「何が必要か」と考えることで、子供が主体的に問題解決に取り組む課題（問い）が生まれると述べた。

協力教員から、「研究アドバイザーの話や皆で考えた授業案でも、この授業の中で子供に付けたい力は何なのかなど改めて考えることができた。」「研究アドバイザーの実践では、子供たちが課題を自分事として捉えられるような工夫がされており、授業づくりの参考になった。」「教材研究では、この授業にはどんな価値があるのか、子供たちが語りたくなるためにどう仕掛けるか大切だと思った。」という記述があった。

研究会の終わりに、協力教員が協働して考えた提案授業の本時案について研究アドバイザーが助言を行った。

#### エ 第4回研究会（11月）

第4回研究会は、提案授業者である協力教員の所属校を会場として授業を参観した。「本時の目標を達成するために、教師の働きかけは効果的であったか。」を参観の視点とした。

また、参観後の協議では、研究アドバイザーが提案授業及び研究会の取組について助言を行った。

協力教員から、「児童の思考をいかにゆさぶり、教師がどのような形で入るか、そして、間違った児童がいたことで皆の学びになったと言える場面を意識した授業にしたいです。」「お互いを認め合う学級集団を作っていくことが必要だと感じた。分からないことは分からないと言えたり、お互いに助け合ったりできる関係がないと自分たちで学習を進めることは難しい。」という提案授業に向けて協働して取り組んだ授業づくりや参観した提案授業についての記述が見られた。

#### オ 第5回研究会（12月）

第5回研究会は、当センターと所属校及び那智勝浦町教育センターをオンラインで繋ぎ



60 分の研修を実施した。各協力教員が研究会で学んだことを生かした実践について報告をした。報告内容から今後、自身の実践に生かしたいことを交流した。

## 5 おわりに

本稿では、全国の教育センター等が作成した複式教育に関する手引やガイドブック、協力教員からの事前アンケートの結果から、複式学級担当教員が抱える学習指導上の課題を見いだした。見いだした課題を全 5 回の研究会の取組を通して解決に迫った。少人数であること、直接指導できる時間が短いことという複式学級の特性を理解し、その特性を強みとして生かすことで、主体的な学びを実現できることが分かった。

深見 (2018) は、「複式授業では、単式指導の場合とは異なり、指導内容や指導方法に工夫が求められる。しかし、教員養成段階においては、教員免許取得のために複式学級の指導法は必須となっておらず、自主的な知識取得が求められる。そのため、複式授業を担当する複式学級担任にはその能力獲得のための努力が必要とされる。」(※7) と述べている。

今後も、市町村教育委員会や複式学級を有する小学校と連携し、本県複式教育の充実と複式学級の学習指導上の課題解決のため研究を深めたいと考える。

### <注 釈>

- 注 1 公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律の一部を改正する法律案(令和 3 年 3 月 31 日) 成立を受けて、小学校(義務教育学校の前期課程を含む)学級編制の標準を 5 年間かけて計画的に 40 人(小学校第一学年は 35 人) から 35 人に引き下げる。
- 注 2 奈良県教育委員会が作成した『複式学級における学習指導改訂版Ⅱ』(2016) には、「複数の学年の児童に対して、学年ごとの教科書あるいは指導内容に沿った教材で指導する方法」と記されている。
- 注 3 和歌山県教育センター学びの丘のウェブページにある「きのくに e ラーニング」に掲載する大学教授等の講義動画と、資料等がセットになった校内研修や個人研修を支援するコンテンツのこと。

### <引用文献>

- ※ 1 『公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律』第三条(昭和三十三年法律第百十六号)
- ※ 2 文部科学省『小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説総則編』東洋出版社 p. 76 (2018)
- ※ 3 同上 p. 77
- ※ 4 同上 pp. 77-78

- ※ 5 笠井健一『初等教育資料 8 月号』東洋出版社 p. 13 (2020)
- ※ 6 同上 p. 13
- ※ 7 深見智一『単学級担任・複式学級担任の学級経営』ふくろう出版 p. 60 (2018)

### <参考文献>

- ・文部科学省『公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律』第三条(昭和三十二年法律第百十六号)
- ・笠井健一『アクティブ・ラーニングを目指した授業展開』東洋出版社(2015)
- ・島根県教育委員会『複式学級の手引(平成 27 年度改訂版)』(2016)
- ・奈良県教育委員会が作成した『複式学級における学習指導改訂版Ⅱ』(2016)
- ・和歌山大学教育学部附属小学校『複式ハンドブック—すぐにつかえる複式指導術—』
- ・文部科学省『小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説総則編』東洋出版社(2018)
- ・深見智一『単学級担任・複式学級担任の学級経営』ふくろう出版(2018)
- ・笠井健一『初等教育資料 8 月号』東洋出版(2020)
- ・北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター『へき地・複式・小規模教育の手引—学習指導の新たな展開—』(2021)